

である」と説いて居る。既に回鶻文といふものと、他のトルコ族の文語との間に相異なる點が存せず、たゞ回鶻文字で書かれて居る故に此の名稱が生じたものであるとすれば、茲に進んで回鶻文字といふものゝ性質を攷究して見なければならぬ。

所謂回鶻文字が回鶻人によつて用ひられたのが何時であるかを論ずるものは、以前には必ず外蒙古オルホン河畔の第三碑として知らるゝもの、即ち此の河谷のカラ・バルガッスンに在る回鶻の愛登里囉汨沒蜜施合毗伽可汗聖文神武碑といふものを引き、此の碑には漢字突厥字の外、更にその一面に回鶻文字が見えるから、此の碑の建設せられた時には、既に回鶻文字は製作せられ、使用せられたものと考へた。一例をトムセン(Thomsen)氏の説に求めるに、氏は漠北に於て回鶻文以前に行はれた突厥文字と、此の新しく生じた回鶻文字との交替期を論じて、^⑬「突厥の國が西紀七四五五年に回鶻に覆された後も、突厥の文字は更に新しき纖巧な形で存在し、かの回鶻時代西紀七八四年に建設せられたと考へられるオルホンの第三碑の上にも認められる。然も此の碑文は突厥文字で記された最後のものらしく、その碑には後に亞刺比亞文字の行はれる時迄盛に用ひられた回鶻文字の既に存するのを認め
る」と説き、八世紀の末近い頃には、回鶻字が漠北の回鶻人の間に用ひられたものと見た。其の他シュレーゲル(Schlegel)、ラドロフ氏等も、これが回鶻人の間に用ひられた時代については、皆同様の考を發表して居る。しかしながら此等の人々が一様に回鶻文字回鶻文と認めた第三碑の文字及び言語は、既に度々自分も紹介した通り、實はソクディアナの文字でまたソグディアナの言語であること、一九〇九年に伯林のミュラー(F. W. K. Müller)氏の論述した所で、爾來一般に認められて居る。たゞラドロフ氏のみは一旦之を承認したけれ共後更に之を否んで、^⑯